

## 【一般演題3】 第12席

## 「道教と中国医学—曾慥を中心として—」

神奈川 宮澤 正順

今回発表する内容は、二つに大別できる。その一は、道教の歴史と医薬学との関係を概観することであり、その二は、第一の観点から宋の曾慥という一人物における医薬学との関係を述べることとなる。

その一については、道教の出発点を後漢の太平道・五斗米道に一応置くとして、論を展開する。『魏志』張魯伝には「祖父陵、…世号米賊。陵死。…魯復行之。…有病自首共過、大都与黄巾相似。」とある。その病者を治療する方法は、黄巾賊徒すなわち張角の太平道と同じである、とする。『後漢書』皇甫崇伝に「初、鉅鹿張角自称、大賢良師、…符水呪説以療病、病者頗愈、百姓信向之。」と記されているところから、道教は当初からして治病をその中心に置いていたことが判然とする。張角には、良・宝の兄弟があり、『後漢紀』孝靈皇帝紀は、彼等について「自称大医、事善道、疾病者輒跪拜首過、病者頗愈、転相誑耀。」と称している。彼等の医療が巫術的なものであったにしても、道教と医療との関係の深さがこれで明らかであろう。やがて符水説は、葛洪や陶弘景等の知識人によって、高度な医薬学に脱皮する。道蔵に医学書及び医薬学の名をはっきり示さなくてもそれらに触れる文献が多く収蔵され、そこには旧医学の誤りを訂正する気運が盛んであったことを示すものがある。高度化した医薬学は内丹と外丹の仙術の中で更に利用される。

曾慥は、その内丹術が特に興隆する宋代の内丹道の南宋に属し、中心となる撰述は、『類説』と『道枢』である。前書には『本草』『素問』『靈枢』『難経』の節録があり、後書には『靈枢』とか扁鵲・岐伯の名がある。彼は、内丹の仙道展開のために従来の医薬をどのように利用しているか検討したい。